

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

伝統校が取り組み始めた、地域から世界を考える人材育成。授業で月に1度以上のフィールドワークを重ねるのみならず、自ら地域イベントに参加するなど主体的に地域と関わる生徒が育っています。

取材文／江森真矢子

地域課題から世界を考える 「知の探究コース」で コスモポリタンを育む



第6回 柏原高校(兵庫・県立)

今年3月、兵庫県立柏原高校で第1回「地域課題から世界を考える日」が開催された。知の探究コース2年生の小橋遼太朗さんは「地域課題は世界に共通する普遍的な課題といえます。田舎は課題先進地。僕たちは丹波を、世界の問題に解決策を提示す

るモデルタウンTAMBAとして発信するための探究活動をしてきました」と力強く話し、ポスター発表をする各班を紹介していった。

農業班、丹波篠山層群・生物多様性班、地域医療班など6班38人の生徒は1学年の総合的な学習の時間「探究I」から丹波をテーマに学習してきた。校内での専門家による講演や市内各地での調査だけでなく、地域イベントへの参加や県外での活動など充実した経験から導き出された提案(図1)は、参加者の活発な意見交換を生んだ。「地域の人や市議会の方の鋭い指摘で、足りないところも分かって良かった」と、受け止める生徒は前向きだ。

この日のアンケートには「海外と地域の問題はまったく別のものではなく、地域の課題が海外の何らかの問題を変えていけると思った」(1年生)、「活動を通し、普段の授業では得られない問題解決能力、思考力、プレゼンテーション能力など様々な力が付くことを実感した」(教員)といった声が寄せられている。

図1 探究テーマと活動・提案内容

丹波の農業探究班 「丹波農業維新計画」	生物多様性・丹波篠山層群探究班 「丹波の自然財産」	防災・減災・里山再三探究班 「丹波市市島豪雨災害から健全な森・エネルギー問題を考える」
前年度の探究テーマ「丹波里山を世界農業遺産に」での市内のフィールドワークや和歌山県「みなべ・田辺」シンポジウム参加などの知見を活かし、今年度は消費者の意識調査を行って地域の活性化策を探究。 【提案】①特産品の認証制度を作り大消費地に出荷②都市部の地域と協定を結び直販	丹波竜など貴重な化石が出た丹波篠山層群、多様な生物種が行き来する本州で一番低い分水嶺地帯などの環境を活用。理学的な研究を行いつつ、資源の活用方法について考察。 【提案】分水嶺①棲息生物のDNA調査②丹波版レッドデータブックの作成／層群①地域の人向け勉強会②学校の授業への導入③研究施設誘致	2014年8月に発生した丹波市市島町豪雨災害を糸口に、里山の荒廃が遠因とされる自然災害を通して、防災・復興プランを研究。鹿肉、猪肉業者や料理店も取材し鳥獣害や里山の暮らしを研究し人と自然の調和した暮らしについて研究。 【提案】①エネルギー②健康な森③農業④イベントの観点からサステイナブルな山間地域モデル
地域医療探究班 「地域医療モデルタウンを目指して」	地域活性化策探究班 「TAMBA LOVERS」	知探プロデュース探究班 「プロデュースで丹波を活性化」
関係各所へ取材等を行いつつ、過疎・高齢化が進む地域の中で今後期待される総合医療を中心とした医療モデルについて研究。 【提案】①医療従事者の定住支援を強化②医療系公立大学の設立③交通手段確保・在宅医療体制の確立	他県も含めた地域活性の現状などを学びながら、市民の住民意識に焦点を当てて探究活動を行った。 【提案】①市民の一体感を醸成する「世界ギネス記録に挑戦」②小学校区でチームを作る「丹波スポーツフェスティバル」③ふるさと教育の実施	イベント参加や、地域活性のアイデアを実現させる活動を行いながらプロデュースを学ぶ。 【提案】①市内3高校が合同してプロデュース活動を行う②丹波をよくするためのデザインコンテスト実施③人気漫画に範を得た丹波を知る参加型ゲーム
【全員もしくは有志で参加したイベント、行事等】 6月～11月:丹波市主催「TAMBA地域づくり大学」(生徒9人参加)／8月:「京都大学サマースクール2015」(知探1、2年生全員参加)／12月:地域おこし協力隊講演(知探1、2年生全員参加)／12月:県民局主催「丹波地域大学連携フォーラム」発表(生徒6人参加)／1月:探求I-II中間発表会／2月:県教委・大阪大学主催「高校生 国際問題を考える日」発表(生徒40人が交流校・金海外国語高校(韓国)の生徒10人と参加)／2月:県民局主催「丹波の森夢会議」発表(生徒2人参加)／3月:高校主催「地域課題から世界を考える日」(知探1、2年生全員参加)／3月:「第5回丹波市地域教育フォーラム」発表(生徒2人参加)／3月:関西学院大学「SGH指定校・アソシエイト校発表会」発表(生徒8人参加)		

2014年度にSGHアソシエイト校に認定された柏原高校は、日本海側と京阪神をつなぐ交通の要所にある

「教育熱心で、電車も電灯も通っていない時代に創立された高校です。総理大臣をはじめとし、多くの人材を輩出してきました」と大西伸弘校長が言うように、普通科進学校として地域教育の中核を担ってきた。

探究Iではスキルを学ぶ



水害の現場視察



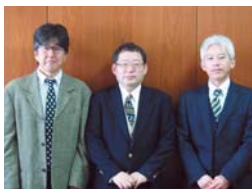
地域課題から世界を考える日



※スーパーグローバルハイスクール。文部科学省の指定事業。グローバルリーダー育成を目指し、探究的な学習を実施する。アソシエイト校はSGH校と開発・実践について情報共有するSGHコミュニティの一員と位置付けられる。



後列左から
 奥村洋先生(2学年副主任・SGH探究推進部)、畑中
 弘先生(主幹教諭、1学年副主任・SGH探究推進部)、
 丹生憲一先生(1学年主任)、坂本秀史先生(3学
 年副主任・SGH探究推進部)、小山定敏先生(探究II
 担当)、萩野幸裕先生(進路指導部長)
 前列左から
 吉田究先生(2学年主任・SGH探究推進部長)、大西
 伸弘先生(校長)、土井敬子先生(2学年知の探究コ
 ース担任)



左から
 田中浩先生
 (2学年担任)
 久保哲成先生
 (主幹教諭
 総務広報部長)
 藤原一彦先生
 (SGH探究推進部)

■ 知の探究コース2年生の声

● 近藤珠理さん(知探プロデュース探究班)

始めは活動が盛り上がり、1時間誰も喋らずに終わったこともあり。まずいと思って一生懸命話したことがきっかけになり、少しずつみんなが意見を言いあえるようになりました。1年生の時はネットで調べて写す、考えるより書いただけだったのが、2年生になってからは情報を基にどう考えるか、班でどう動くか考えるようになりました。一番楽しかったのは「新丹波百景」を作った時です。班の話し合いがすごく盛り上がり、SNSで地域に呼び掛けたら、あっという間に100枚以上の写真が集まりました。地域の年配の方と話した時、あれもこれもやりたいといっぱい夢がでてきて、それを聞いて前向きな気持ちになりました。高校生みんなが私たちのように丹波を盛り上げようと考え、動くようになったら地域も変わると思います。

● 小橋遼太郎さん(地域活性化策探究班)

1年生の時は里山ゼミで「里山の教育的価値」というレポートを書き、今年度はもっと深めたいと地域活性化策班を選びました。「TAMBA地域づくり大学」や「丹波市地域教育フォーラム」で地域の大人と話し、つながりができました。将来的には一つの職業にとらわれずに地域プロデューサー的な活動をしていきたいと思っています。地域や人のためになることを自分で作っていく生き方をしたい。中学の時は結構独りよがり、自分さえ勉強できればいいと思っていたりしましたが、「探究」の中で、人と何かをすることが一番大切だということに気づけました。それが楽しいしやがりがあると思える、そこが一番変わりました。

1986年設置の理数コースを08年に「知の探究コース」(1学級)へ改組したのは「理系だけでは生徒や地域のニーズに答えられなくなってきたから」(大西校長)というが、伝統に甘んじることなく地域ニーズに答えてきた証左だろう。丹波をフィールドにしたSGH申請もその取り組みのひとつ。「右肩上がりの時代は成功モデルがあり、本校も都会へ人を送り出していました」(大西校長)。「高校生になると大人との関わりが少なくなり、大人たちも勉強をしていけばそれでよしと考えていました。でも今、世代を超えてつながらないと立ち行かないと地域が気づき始めています」とSGH探究推進部の奥村洋先生も続ける。

初年度の申請はテーマに「丹波の里山を世界農業遺産に」を掲げた。地域魅力化・活性化モデル、グローバル社会に対応した地域モデルを構想する学習活動を通して「地域から世界を考える『開かれた個』を育成する知の拠点校」となることを目指した計画だ。

地域と深く関わり 丹波が「自分の場所」に

しかし、初年度に続き、より多面的に地域課題を探る「丹波からTAMBA」をテーマとした2年目もアソシエイト校としての指定しか受けられず、予定していた海外フィールドワークは予算面からも実施困難となった。「3月末の発表を受けて走りながら調整してきました。結果、教師も生徒も深く丹波に関わることになり、地域とのつながりがより強くなりました」と、SGH探究推進部長の吉田究先生は言う。長期ビジョンは4月に共有するが、今も毎週の会議で相談しながら運営している。

15年度の「探究I」はアカデミックスキルの習得に重きを置き、①1学期を中心に専門家や地域の人の講義を通して「聴く力」②2学期以降の班別地域研究活動を通して「調べる力」③講義まとめやレポート、班発表など全体を通して「発表する力」をつけるカリキュラム。「探究II」では、要素としての全体講義や中間発表、最終の発表会を除いては各班がそれぞれのペースで動いた。

班は生徒が取り組みたいテーマを出し合い、6つにグループピングしたもの。毎月のように調査に出掛けたり、イベントで自分たちのアイデアを実行するダイナミックな動きは、6〜8人の班に1人の教員という体制が後押しする。そして生徒の中には、地域の人との協働の場に参加するなど、主体的な地域との関わり、行動が見られるようになったという。

主幹教諭の久保哲成先生は「教師は全力で待つスタンス。生徒のテーマを見ると見通しがつきませんが、そこで道を示してしまおうと生徒は面白くありません。だから教師側はしんどいですがね」と笑う。

地域主催の勉強会にも参加した井本日和さんは「思っていた以上に丹波のことを真剣に考えている人がたくさんいて、丹波で働く意思が固まりました」と授業や課外活動を通して丹波に愛着を持つようになり、将来像も明確になったそう。2年生にとったアンケートでは「丹波は良いところだと思う」という設問に知の探究コースでは70%以上が肯定的な回答だったのに対し、他は50%ほどと差が出た。次なる課題は1コースで始めた地域課題解決学習のエッセンスを全校に広げることだ。

School Data

1897年創立/普通科/生徒数764人(男子365人、女子399人)/進路状況(2015年度)大学・短大175人、専門学校36人、就職10人、その他11人